論文の和文要旨	
論文題目	状況設定が異なるライティング課題の検討 ー教室内で書かれた英作文と教室外で書かれた英作文を中心にー
氏名	井之川睦美

本研究は、状況設定（言語活動を行うために設定した物理的状況に関する条件）の相違が、ライティング課題と書き手のライティングに対する認識にどのように反映するかを検証することによって、ライティングと状況との関連を明らかにすることを目的としたものである。比較検討する英作文は、テスト環境に近似する状況設定と、時間や参考ツールに関しての制限が少ない状況設定で書かれた英作文である。本研究は日本人大学1、2年生が書いた英作文を量的、質的に分析した実証研究である。本稿は6章から構成される。第1章で問題提起を行い、第2章において第1章で示した疑問の理論的背景と先行研究を検証した後、研究設問を提示し、第3章、第4章、第5章において、実施した3つの調査についての報告を行い、第6章で総括を述べる。

英語教育の授業に取り入れられる言語活動にライティングがあるが、ライティング課題が行われる状況には、教室内で行われるテスト環境に近似する状況設定や、宿題のように時間等の制限の少ない教室外という状況設定が考えられる。こうした異なる状況でなされるライティングには、どのような相違点、あるいは共通点があるのだろうか。状況が異なるにも関わらずライティングに一定の傾向があるとわかれば、指導・学習・評価への示唆となりうる（Weigle,

2002)。

従来、ライティングといえばライティングプロダクトであるテクストを意味していたが、ライティングプロセス、社会的文脈へと変容を見せており、*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment* (Council of Europe, 2001) にもあるように、ライティングは「書かれたもの」という認識にとどまらず、社会的行為であるという見解が生まれている。また、Grabe & Kaplan (1996) はライティングがなされる外的文脈の詳細な記述を示し、ライティングは外的文脈である状況と相互作用しながらゴール設定を見直し書き進められるものであるというライティングモデルを提示している。さらに言語使用の能力を測るテスト開発においては、テストが実施される時間や場所等の物理的状況がテストの特性としてとらえられている (Bachman & Palmer, 1996)。先行研究には状況変数となる時間や場所、参考ツールがライティングへ与える影響に関する調査があるが、結果には相反するものがあり一定の結論に至っていない。よって、ライティング課題の状況設定である、時間と場所、参考ツールに焦点をあてた 3 つの調査を実施した。調査は、テクストを T-unit にコーディングにした後、流暢さ・正確さ・複雑さの観点から量的に比較し、さらに質的分析を加えた。また、使用語彙の分析は、異なる状況設定でなされたライティング全体を一つの小さなコーパスととらえ比較対照した。書き手となる参加者の認識は質問紙を用い検証した。

調査 1 は、「教室内で時間制限があり、参考ツールが使用できない状況設定で書かれた英作文(教室内英作文)と、教室外で厳しい時間制限がなく、参考ツールが使用できる状況設定で書かれた英作文(教室外英作文)」を対象としたものである。研究設問は 1) 教室内英作文と教室外英作文は、評価、正確さ、使用語彙の観点から、どのように異なるか、2) 教室外英作文の状況は、どのようなものか、である。参加者は 21 名の大学 1 年生で、教室外英作文は教室内英作文の書き直しとした。

統計的検証を行った結果、教室内英作文と教室外英作文の正確さ (Error-free T-units/Total T-units) に有意差は認められなかったが、評価については有意差が認められた。

使用語彙については語彙分析ソフトを用いて語彙の難易度を調査したが、教室外英作文に難易度の高い語の出現がわずかではあるが観察された。また、定冠詞 the の脱落が教室外英作文では減少した。さらに、教室外では辞書が使用されていたことが判明した。

調査 2 は、調査 1 と同様の状況設定で書かれた教室内英作文と教室外英作文であるが、教室外英作文は教室内英作文の書き直しではなく異なるトピックの英作文とした。参加者（分析対象とした数）は 75 名の大学 1、2 年生である。研究設問は、1) 教室内英作文と教室外英作文は、評価、流暢さ・正確さ・複雑さ、使用語彙において、どのように異なるか、2) 教室内で高い (低い) 評価の英作文を書く参加者は教室外でも高い (低い) 評価の英作文を書くか、3) 教室内英作文と教室外英作文に対する参加者 (書き手) の認識の相違は、どのようなものか、4) 教室外英作文の状況は、どのようなものか、である。

結果であるが、教室外英作文には 1 週間の時間が与えられていたが、実際にライティングに費やされた時間は 30 分～1.5 時間であることがアンケートへの回答からわかった。ほとんどの参加者が参考ツールを使用しており、辞書、翻訳ツール、英語の参考書等の使用がみられた。英英辞書の使用はほとんどみられず和英辞書の使用が多く、このことから日本語の介在があったライティングであることがわかった。流暢さ、正確さ、複雑さの観点から教室内と教室外の全英作文を比較すると、流暢さと複雑さについては有意差が認められたが、正確さ (EFT/TT) については有意差がみられなかった。教室外で使用された参考ツール群別の比較では指標によってばらつきがみられたが、正確さを示すほとんどの指標に有意差が認められなかった。使用語彙については、教室内に比べ教室外英作文の語彙の多様性が高いことが示され、さらに、語彙分析ツールを用いた分析結果から教室外英作文には頻度が低い語彙の使用があることが示された。同一参加者が書いた教室内と教室外の英作文の評価差については、教室内英作文の評価が低い参加者の評価差と高い参加者の評価差の様相に違いがみられた。さらに、“I”を主語とする節が両方の英作文に数多く出現しており、また、日本語の助詞「は」の影響と思われる文構造が正確さの低い英作文に出現しているのが観察された。英作文への認識

であるが、英作文に対する満足度は教室外英作文の方が教室内英作文より高くなり有意差が認められた。

調査3は、辞書使用有無の相違がある状況設定のライティングに関するものである。研究設問は、1) 教室内で時間制限があり辞書が使用できる状況設定で書かれた英作文と、教室内で時間制限があり辞書が使用できない状況設定で書かれた英作文は、評価、流暢さ・正確さ・複雑さ、使用語彙の観点から、どのように異なるか、2) 教室内で時間制限があり辞書が使用できる状況設定で書かれた英作文と、教室内で時間制限があり辞書が使用できない状況設定で書かれた英作文に対する参加者 (書き手) の認識の相違は、どのようなものか、である。参加者は45名(分析対象とした数)の大学1年生で、2クラスのうち1クラスが辞書を使用して英作文を書き、トピックは同一である。

結果は、英作文の全ての指標に有意差が示されなかった。使用語彙に関しては、辞書を使用しなかった英作文に比べ、辞書を使用した英作文の語彙の多様性が高いことが示され、また、使用語彙レベルにも差が認められた。さらに話題の記述量に差がみられ、辞書を使用した英作文では辞書検索から得られた語を用いて話が展開されていたことから、参考ツールの使用が内容に影響を与える可能性が示唆された。英作文への認識の相違に関しては、トピックの書きやすさへの認識に差があり、辞書を使用したクラスの方が書きやすいと回答した数が多く、有意差が認められた。難しかった点に関する言及には偏りが見られ、辞書を使用したクラスでは文法や構文、そして時間に関する言及数が辞書を使用しなかったクラスに比べ多くみられた。

調査結果から、テスト環境に近似する状況設定と時間や参考ツールに関しての制限が少ない状況設定の相違が、テクストの正確さ (EFT/TT) に反映しない傾向があることが示唆された。教室外英作文は、流暢さと複雑さ (Total words/Total T-units) が高く、多様な語彙が使用され高い評価を受ける英作文となる可能性が示された。また、書き手の時間に対する認識が状況によって異なることから、書き手は状況設定に合わせてライティングのゴール設定を行っている

と考えられる。このことから、教室外で行われるライティング課題や参考ツールを用いて行われるライティング課題は、広義のライティング能力を問うものであると言えよう。また、ライティングへの困難さの認識の相違から、辞書等の参考ツールを使用したライティングは、参考ツールを使用しないライティングと認知的作業が異なるライティングであると考える。さらにライティングを社会的観点からとらえれば、こうした参考ツールを用いたライティングは第二言語学習者が行う言語活動としての必然性が認められる。最後に、和英辞書の使用によって日本語の影響を受けたライティングとなる可能性があることから、英語と日本語の文構造の相違に注目し、さらに一文レベルだけでなく文脈の中で表現したい概念を英語にする学習・指導の必要性があることを示唆として加えたい。